

博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名	He Yongchang 何永昌
学位	博士（法学）
学位記番号	新大院博（法）第36号
学位授与の日付	令和4年3月23日
学位授与の要件	学位規則第3条第3項該当
博士論文名	秦漢時代における東部ユーラシア国際システム—その形成、変化及び崩壊—
論文審査委員	主査 教授 真水康樹 副査 教授 稲吉 晃 副査 教授 神田豊隆 副査 大阪経済法科大学 国際学部 教授 伍 躍 副査 北京大学 国際関係学院 准教授 帰 泳涛

博士論文の要旨

本論文は、「東部ユーラシア」において、秦漢時代に初めてシステムとして成立した国際システムの形成、変化及び崩壊について論じたものである。秦漢時代のこの国際システムにおいて、古代東部ユーラシア国際制度が形成され、この地域はひとつのシステムとして機能し始めた。この問題を分析するために、本論文は、国際システムに関する理論枠組みにもとづいて、秦漢時代における東部ユーラシア国際システムを「境界・ユニット・相互作用および構造」から解釈し、説明している。

本論文は、以下のとおり構成されている。

第1章では、理論枠組み及び構造に関する判断の方法が説明されている。システムに対して、これまでの理論付け（システム理論とシステムに関する理論）を整理し区別したうえで、システム形成の条件（境界・ユニット・相互作用）が明らかにされる。さらに、権力分布、国際制度、国際文化などの先行研究が示す選択肢のなかから、権力分布をとりあげ、それをシステムに特徴をあたえる構造とみなしている。量的な権力ではなく、関係的権力（階層的権力）観に立ち、制度による階層性を基準にして、システムにおける階層関係を明らかにすることをつうじて、そこにおける権力の集中点としての国家の数によってシステムを単極、二極と多極に判断し分類している。

第2章では、システムの形成条件である境界・ユニット・相互作用にもとづいて、東部ユーラシア国際システムの形成を明らかにしている。具体的には、地理的・経済的・政治的側面から、東部ユーラシアと他地域との境界を明かにし、そのうえで、東部ユーラシアを、地理、生業、生活的要素を基準に、「農耕地域」と「遊牧地域」と及び「西域」に分けている。そして、各地域におけるユニットである前国家アクターと国家が領土・人口・政府などの構成要素と独立自主的に対外政策をおこなえる能力要素を備えていることを説明している。最後に、農耕地域、遊牧地

域と西域という三つの地域間で、漢と匈奴との関係を軸とした頻繁かつ軸複合的な相互作用の形成プロセスを明らかにすることをつうじて、東部ユーラシア国際システムの形成が、漢と匈奴との「争覇」によるものであることを明らかにしている。

第3章では、東部ユーラシア国際システムにおける国家間相互作用が歴史的に明らかにされている。農耕帝国としての漢と遊牧帝国としての匈奴が漠南において直接に対抗しながら、西域をめぐる覇権を争うという二つの側面から、両漢時代の東部ユーラシアにおける相互作用が分析される。そして、システムに影響を及ぼす大国である漢と匈奴との関係を時代区分の基準にし、漢と匈奴との争覇による対抗の時代、匈奴の漢への称臣により始まる平和の時代、新と匈奴との決裂から漢と匈奴との争覇までの対抗の時代、及び北匈奴滅亡後の漢による単極の時代という四つの時期が設定され分析が展開されている。

第4章では、農耕地域における漢帝国の形成、及び帝国内での中央政府と異民族との相互作用について検討している。秦漢は農耕地域の辺縁（南越、閩越、東瓠、西南夷、朝鮮）を征服し、その後、郡県制および支配強化政策をつうじて、帝国の一部として統合した。一方、漢は、匈奴に勝って、農耕地域と遊牧地域との接壤地帯を征服し、そこに投降、俘虜、内属などによって定着した異民族を特別な政治制度と組織で統治したのだった。このように、漢では、多くの異民族が漢王朝に支配された。しかし、漢の支配および搾取により、異民族は相次いで反乱を起こし、帝国を内部から崩壊させていくことになる。

第5章では、秦漢時代における東部ユーラシア国際システムの国際制度を明らかにし、これらの国際制度の階層性から、構造としての権力分布を解明している。秦漢時代の東部ユーラシアには、質子、朝貢および冊封という三つの階層的国際制度があった。これらの国際制度の階層性を基準にすると、東部ユーラシア国際システムは、形成された時から北匈奴の滅亡までは、税としての政治的朝貢による覇権を樹立した匈奴、そして冊封による覇権を樹立した漢、という二つの権力中心があったため、二極システムを形成していた。その後の時代では、北匈奴が滅亡した後、部族同盟という段階に留まっていた鮮卑は匈奴に代わって覇権を樹立することができず、漢のみが権力中心となったため、東部ユーラシア国際システムは単極システムになったのであった。

以上の考察にもとづき終章において、He Yongchang 何永昌は、次のように結論づけている。漢は、その天下観と華夷思想により政治的権威の獲得を目的とし、その覇権の及ぶ国家と君臣関係を結んで中央集権的制度により水平的覇権を樹立し、一方、その覇権の及ばない国家に対しては羈縻政策が理想的覇権だと考えた。匈奴は、経済的補充を目的として、その覇権の及ぶ国家に税を重く課し、国内の分権的体制をその覇権の及ぶ地域に用い、ハブ・アンド・スポーク型の垂直的覇権を樹立した。その覇権の及ぶ国家がこれらの覇権国を見習ったり、覇権の消えた後に覇権の復活を請うたりしたことから見ると、漢と匈奴の覇権は成功し正当化されたと考えられる。けれども、匈奴は農耕地域経営能力の不足、軍事的奪略の持続、漢からの攻撃の回避、遊牧性の保有ゆえに、また、漢は遊牧地域の無用視、政治的支配と軍事的配置による財政的重荷、地方問題拡大の回避、異民族の反乱への警戒ゆえに、システムを帝国に取り込もうとする努力をおこなわなかった。そのため、東部ユーラシアは、帝国システムになることはなかった、と結論づけている。

審査結果の要旨

本論文は、国際システムに関する理論枠組みにもとづいて世界史全体を射程に入れる英国学派の視点にたつて、秦漢時代の東部ユーラシアを対象として分析をおこなったという点で注目されるべきものである。

英国学派の関心は世界規模のものであるが、個別地域の詳細については多くの空白を有する。東部ユーラシアについては、現状では明清時代について華人系の専門家による二次資料にもとづいた研究があるのみである。中国籍の学生であり、中国古典に通暁する He Yongchang 何永昌はその歴史知識と古典籍読解能力を活かして、この理論枠組みによって、秦漢時代の分析に取り組んだ。この点に研究の独自性を見ることができる。

本論文の意義は、以下の5点にまとめることができる。

第1に、英国学派の国際システムに関する理論枠組みを東部ユーラシア地域に適用し、適切な分析成果をあげたことである。この作業は、英国学派の理論枠組みに対してもフィードバックされうる内容を持つという意義も有する。

第2に、東部ユーラシアという地域設定をすることで、秦漢史という中国史の枠組みを越えてより多角的にこの地域のユニット間の相互作用を分析することに成功している。この地域設定は、伝統的な中国史研究に対しても、深い問題提起を含みうる。

第3に、西域をめぐる漢王朝と匈奴というユニット間の相互関係から、この時代のこの地域の国際システムを読み解く視点を設定した点である。

第4に、明晰な概念と理論枠組みを用いて、東部ユーラシアにおける400年におよぶ国際システムの変遷を、一貫した視点から描きだした。

第5に、システムの変遷を分析しながら、質子、冊封、朝貢などの政治制度の生成と発展に注目し、一次資料を用いながら、その実態を的確に探り出し、描き出したこと。それは今日、当然視されているような朝貢・冊封体制認識を相対化し、さらに再検証を迫りうるものとなっている。

以上、He Yongchang 何永昌の博士論文「秦漢時代における東部ユーラシア国際システム—その形成、変化及び崩壊—」は、英国学派の国際システムに関する理論枠組みにもとづいて、中国古典籍の一次資料を用いて、秦漢時代の東部ユーラシア国際システムを分析した論文として高く評価できる。もちろん、英語原文の分析概念が十分にこなれた日本語に移植しきれていない点、引用した古典漢籍が書き下し文になっていない点など、なお不十分な点があることは確かである。しかしながら、国際的な影響力をもつ英国学派の複雑な理論枠組みを原文で読み解き、その方法論を自家薬籠中の物とし、秦漢史に関する日中欧米専門家による膨大な研究業績をくまなく渉猟するとともに、一次資料である中国古典籍の原典も広範に検討して分析しているという点で、課題意識の明晰性と問題究明の一貫性は大いに評価されるべきであり、その結果である各章の分析も緻密かつ明晰である。その裾野をなす広範な関連文献収集とその解読に費やされた努力と労力も、十分に評価されるべきであろう。

なお、本論文は中国をその一部として含む東部ユーラシアについて、国際システムに関する理論枠組みにもとづいて論じたものであり、国際関係論の論文であるといえる。そのことから、本論文は、博士（法学）の学位を授与するのが適切であると判断した。

以上の審査結果から、本論文は博士（法学）論文としての水準に十分に達していると評価することができるというのが、本論文審査委員会の一致した結論である。